

孔夫子教授一斑（接前號）：論説

著者	内田，周平
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 0
ページ	3 - 6
発行年	1894-11-03
その他の言語のタイトル	孔夫子教授一斑（接前号）：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/4447

論 說

孔夫子教授一斑

(接前號)

教授 内田周平

夫子罕に言ふ所の者あり常に言ふ所の者あり。論語に門人らの常に言ふ所の者を記えて曰く子所雅言、詩書執禮、皆雅言也と言ふは夫子教を設くる人に因りて而して施す固より亦言はざる所なし而して更に常に言ふ所の者あり常に言ふは維れ何んぞ詩あり書なり執禮あり皆らの常に言ふ所の者なりと蓋し詩の教たる以て性情を養ふべく書の教たる以て政事を考ふべく禮の教たる以て節文を謹むべし是三者は皆日用身に功あるの具なり禮に獨り執と言ひし者は人の執守する所を以て言ふ詩書は惟誦讀を假りて然る後能く其義を知りて而して之を用に達す禮は即ち全く人の執守して而して之を行ふに在り故に禮に獨り執と言ひしあり是れ前に夫子學易の語あるに因りて而えて之を類記せしかり古者載籍詳かからず國に大事あれば則ち始末を具へて而して之を記えこれを後世に貽す其軀典諠訓誥の別あり之を名けて書と曰ふ宗廟朝廷に樂章あり閭里の間に歌謠あり采りて而して之を輯め以て風詠に供す其義に風賦比興雅頌の異あり之を名けて詩と曰ふ書は固より四代聖王天下を治むるの大經大法、帝王臣民の奉承して遵守する所の者なり此れを讀まざれば則ち以て人道の本づく所政治の由る所に達する能はず詩は則ち人の思ふ所之を言に陳べ風俗の盛衰人情の險夷、以て節物氣候の變、鳥獸草木の名に至るまで具に備はらざるを此れを讀まざれば則ち世に處し人に接して以て之

れと言ふ能はず故に古の儒たる者は只是れ詩書禮樂を習ふ執禮と言へば則ち樂は其中に在り易と春秋とに至ては夫子自ら謂ふ加我數年、卒以學易と又曰く春秋天子之事と一は理濫を説き一は事變を紀す共に初學に施すべきは非ず且つ夫子は嘗て學者に易を看んことを教へず蓋し易は是れ箇の極めて理會し難き底の物事、他書の比に非ず且らく先づ詩書禮を讀むの却て緊要あるに如かず朱子謂ふ易掌於太卜、春秋掌於史官、學者兼通之、不正是業と所謂不正是業は只是れ常業ならざるあり易の書たるが如き之を精にすれば便ち天地の道を備ふ人の知り易き所に非ず之を淺にすれば只是れ卜筮の用のみ學者日用常行自ら許多事理の眼前に在るあり如何ぞ他を以て常業と爲さん春秋と以て世變を知るべしと雖ども然れども未だ聖人の筆削を経ず勸懲の義尙は未だ昭然たらず日常間、這の世變を知らんと要する是を學者己れに切なるの事に非ず故に亦常業は非ず只兼ねて之に通ずるのみ此の如く見て方に雅の字と意會す可し本文畢竟所の字皆の字を看んとを要す門人は親炙熟服の久き纔に詩書禮の上よ於て尋味し便ち聖教に親切の處あるを見得し纔に聖教の上に於て理會し愈愈詩書禮の人を益するを見得せしなり所の字皆の字當に此の如く看るべし是れ聖人が此れを以て教を立てしからず亦是れ偶然道ひ及びしならず全く是れ記者親炙習傳日久しく聖言大概此れを離れざるを覺得せしなり雅の字の情景義旨、方に是の如し夫子日にこの三經を提げて課程と爲したるに非るあり

夫子の罕に言ふ所の者は利と命と仁とあり論語に云く子罕言、利與命與仁とこの罕言は不語無言と同からず不語無言は箇の教旨の在るあり罕言は只是れ記者が傍觀して此數者夫子之言ふこと甚だ少きを見得し便ち之を類記せしなり兩の與の字は乃ち記者指數の詞、三件類記して而か

も不倫あり故に兩の與の字を著けて之を聯屬す同一の罕にして而して罕ある所以の故は正に各々同からず程朱二子之を註すると甚だ明らかり程子曰く計利則害義、命之理微、仁之道大、皆夫子所罕言也と朱子曰く罕言は是れ言はざるならず又多言すべからず特だ罕に之を言ふのみ罕より利を言ふ者は蓋し凡る事を做すに只這の道理に循ひて做せば利自ら其中に在り利涉大川、利、用、行、師の如き聖人豈に利を言はざらんや但だ罕に言ふ所以の者正に恐る人之を求むれば則ち義を害せんことを罕に命を言ふ者は凡る吉凶禍福皆是れ命、若し儘ま命を言へば恐らくは人之を命に委して而して人事廢ぜんことを所以に罕れに言ふ、罕に仁を言ふ者は恐らくは人輕易に看了して切已上に工夫を做すを知らざらんを然れども聖人若し言はざれば則ち人又如何ある是れ利如何ある是れ命如何ある是れ仁を理會し得ず故に言はざるべからず但だ利を言はずと雖ども而れども言ふ所の者は利に非るはなし命を言はずと雖ども而れども言ふ所の者は命に非るはなし仁を言はずと雖ども而れども言ふ所の者は仁に非るはなしと又曰く利は義の和なり惟義に合へば則ち利自ら至る若し多く利を言へば則ち人義を知らずして而して反て利を害せん命は天の令あり然れども人當ふ已を修め以て之を俟つべし然る後に以て命を立つべし若し多く命を言へば則ち人事修まらず而して反て命を害せん仁は性の徳あり然れども必ず忠信篤敬、克己復禮、然る後に能く至る若し多く仁を言へば則ち學者虛、偽、等、を躐へて而して反て仁を害せん三者皆理の正、聖人言はざる能はざる所、而れどもこの憂ひ深く慮り遠ければ則ち又以て多言すべからざるあり故に罕れに言ふのみと今程朱二子の言を括約して夫子の罕に言ふ所以を説かん、當に左の如くなるべし曰く利は元と不好の物に非ず然れども公私の別あり又公利と雖ども偏に利心を主とするときは動もすれば計較を作して義を害するゆゑ命の説は甚だ明か

に、し、難、し、深、く、之、を、言、は、す、初、學、の、解、し、得、る、所、に、非、ず、淺、く、之、を、言、は、ば、俗、人、輕、し、く、之、を、信、じ、て、自、ら、勉、行、せ、
ざるを恐る。仁の理は至つて大あり。之を説く鄭重ならざるべからず。之を行ふ者に於ても亦等級の不同
と才質の高下とあり。能く此に慮らずして數々之を言ふときは惟人をして等を躡へまむるのみならず
亦人をして之を玩ぶの心あらしめん故にこの三者は夫子の罕れに言ふ所以なり。若し然らずんば夫子
論語に於て仁を言ふ者一再見に止らず。易六十四卦は皆利を言ひ又尤も性命の原を詳にせり。此れ何ん
ぞや。乃ち知る罕れに言ふ者は夫子の人に教ふる親切なる處にして門人等の平日の見る所に就きて而
まて之を類記せし者なることを。

何をか歴史といふや

講師 湯 原 元 一

歴史といへるこの意義は、古來幾多の變遷をあし來たり。今其の變遷の跡を考へて之を大別すれ
ば、叙説を主とするもの、利用を主とするもの、及び發達の講究を主とするものとの三者となすこと
を得べし。而して其時代の前後をいへば、叙説を主とするもの、初めて出て、利用を主とするもの、之
に次ぎ、發達の講究を主とするもの、又之に次ぎて起れり。

第一、叙説を主とする時代に於ては、人々只その耳目に珍らかざることを知らんと欲するのみにて、
他に何の目的もあかりき。是れ恰も、幼兒が、於伽草紙の中なる物語をきゝて喜ぶと一般、まこと無邪
氣の沙汰とやいはん。西洋にては、希臘羅馬の往時に行はれたる諸ろの勇將談の如きは、其の著しき
例にて、我邦にては、稷田阿禮が口誦したりといへる、古事記中の事實の如きは、其の幾分は、もとは
この類あるべし。延喜式に載する出雲神壽の如きは、上古、語部かたりべにて、語り傳へ、言ひ繼ぎたりといへ